

## 第5章 広間

### 第1節 現状調査

#### イ. 平面

御居間より西南に約16度開きに納める。西室御化粧間の(七ノカ)隅より1.57m幅に廊下を取り、西南に1.81m幅のステージを設け、3間×5間、15坪、畳30帖の広間とし、西南端に奥行0.76mの床脇と床の間をそれぞれ1間・2間幅に構える。広間の両側に約4尺4寸幅のエン備付ステージの両横の前室に繋ぎ、客の導入を計り東南側前室より約2m進み135度東に開き、池彦本館に接続されていた。

#### ロ. 基礎

広間エン備境と床の間背面部とステージ裏の取り囲む部分に無筋コンクリートフーチング布基礎を廻す。両端エンの框下には台形の番石を据え付ける。

#### ハ. 木軸

桁行は11.48mに床の間深さ0.76mを加算する(1間幅約1.914m)、本建梁間5.84m(1間幅約1.947m)に両下屋約4.4尺(1.325mと1.34m)を下ろす。

本建柱は土台上に松材120角18本で14尺(4.2m)に設える。軒桁は135×260とし、柱より1廻り太めに作る。下屋柱は松105角支柱(3mもの)に台形切石束立としエン框(雨戸一筋敷居)、中鴨居に太めの軒桁 杉160×260を通す。

#### ニ. 床組・小屋組

軸組下部に足固めを廻し、1間間隔に末口150φ杉丸太加工を通し、根太を渡し、畳敷床に仕上げ。エン部分は根太に厚板(厚21m/m緑甲板)にベニヤ下地カーペット貼りで畳高さに調整し、バリアフリーとする。

小屋組は洋小屋で3間渡しの合掌組で単軒に垂木を組む。下屋部は野垂木、化粧垂木の二段に組

む。

#### ホ. 屋根

和型棧瓦葺き。棧平瓦(303×257)背面に製田岩田堅上の刻印が(右から左へ)ある。鎌軒瓦と万十無紋軒瓦の併用であり、片側入母屋造り、一方切妻に納め両端に風切丸が下屋共それぞれ2本を流す。瓦そのものは昭和の制作と考えられる。工法としては杉皮貼り一筋土葺きに施工されていた。また本館との渡り廊下は銅板一文字葺きである。

#### ヘ. 外観壁

- 南側面 東渡り廊下接続端より、第一間と第三間は1.5間のエン開口、雨戸敷に腰板付硝子戸3枚建て、第二間は2間に同建具4枚建ち、残り第四間は雨戸10枚収納の戸袋が付く。エン框下は開放で本建ち足固め、土台間に換気用遮子窓が付く。
- 西側面 本建部柱3本表して横板を全面に張る。脇床部の地窓(硝子窓420×1080)が付く。
- 北側面 南側面の裏返しに仕上げ、東端に横板張りの壁が付く。本建南北面の下屋上壁は、土塗り真壁漆喰に仕上がる。
- 東側面 御居間との接続面でステージ背面間仕切りである。

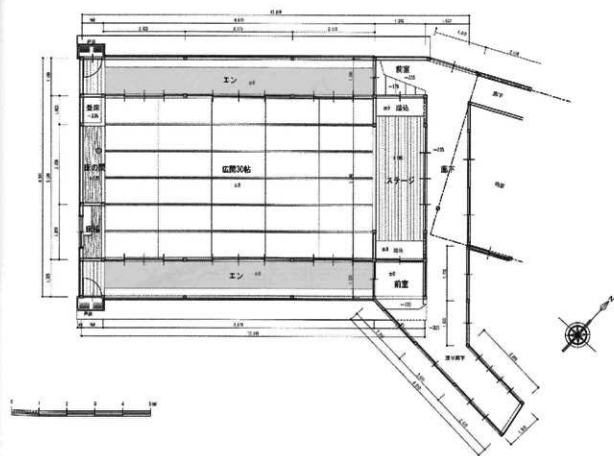
#### ト. 造作

床の間の地板は樺突板合板で板も樺張り板、2間の中央に杉磨き丸太190φを建て、右手半間を1段高上げた畳敷きのビワ床に構える。1間幅の床脇も樺突板合板の地板で右手より中程まで2段組みの欄板を天井より晒し竹で吊る。板はカンシュー漆で仕上げる。天井は杉板半緑天井に仕上げ

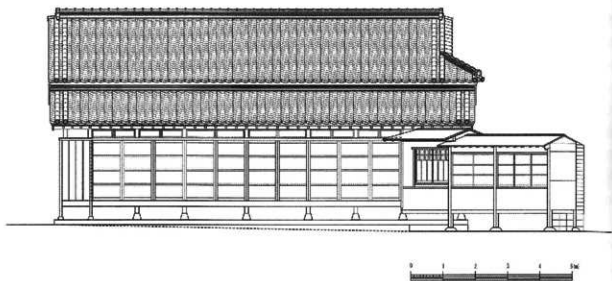
敷居・鴨居は桧材でステージ床は厚板の縁甲板にカーペットを貼る。同様のカーペット貼りは廊下から渡り廊下に進み、前室両エン同様当初床板の上に高さ調整し、ベニヤ下地にカーペットを貼る。天井は広間とステージが杉柵桎ベニヤ竿縁天井に張り替えられ、この外は当初の杉板竿縁天井のままである。壁仕上げは土塗り下地ジュラク塗りである。この広間棟は昭和28年頃に建築され、昭和50年の大修理が実施されたものであろう。

#### チ、建具

向端エン欄雨代りの硝子戸それぞれ10枚を収納する戸袋の内側の片開き舞良戸が付く。欄間は透明硝子の嵌め込みである。広間とエンの間仕切建具は腰板中硝子入り組子障子12枚に、引違い硝子格子欄間12枚組がそれぞれに付く。エンと前室境は桎板戸の引違い。ステージ前室境は腰板付硝子格子引違い戸に嵌め殺し格子組欄間が付く、ステージ背面は中抜き組子障子入り襖の4枚引違いであり、その両端壁面は格子組硝子嵌め火燈窓が付く。以上のデザイン等は近代的であり、昭和50年の修理時作品であらう。



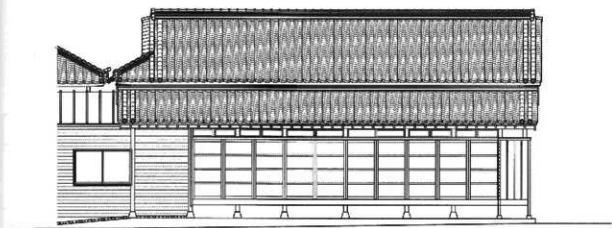
第44図 広間平面図



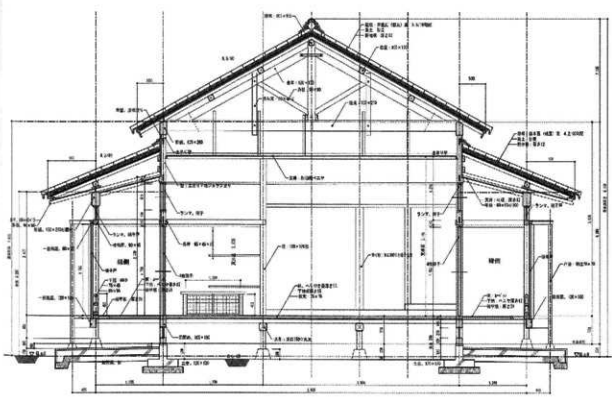
第45図 広間南側立面図



第46図 広間西側立面図



第47図 広間北側立面図



第48図 広間矩計図

## 第6章 瓦調査に関すること

以下の瓦類を確認した。多種多様である。

### イ. 鎌軒平瓦類





















符号	文様 (拓本)	名称	刻印	寸法	備考 (府内城出土瓦類年分類区分)
a		花卉状文均 整唐草文		305×300	G群古段階 (21) 中心飾りの左右3枚の業と 2反転の唐草で構成 (18世紀後半⇒天明～寛政頃)
b		花卉状文均 整唐草葉文		295×265 305×293 310×295	G群新段階 (22) (23) 中心飾りと業文で構成 (19世紀前期～中頃⇒ 幕末～明治) 同類に 等がある。
c		五三の桐均 整唐草葉文		290×265	
d		菊花均整唐 草葉文	 無刻印	305×257 310×257	
e		半菊花均整 唐草葉文	無刻印		

### ロ. 本葺軒平瓦類

符号	文様 (拓本)	名称	刻印	寸法	備考 (府内城出土瓦類年分類区分)
g		変り橋文均 整唐草文		240×245	珠点付きでシベ上まで円形状に 囲み、中心飾りの線部は減少し 葉状文は厚肉彫りである。 瓦の形、肌、音質に古さは感じ られずF群2類より下がり、明 治期以降と考える。

### ハ. 平瓦の刻印類

符号	文様 (拓本)	名称	刻印	寸法	備考
棧 平 瓦 刻 印				295×260	働長 130
				305×248	働長 125
				300×270	クツワ 働長 130
				310×298	働長 135
				310×295	働長 130

棧平瓦刻印		背面刻印		310×300	筋長 130
				尻カット 310×250	筋長 135
				315×258	筋長 130
					
					
				310×245 270×125	製東井
				303×257	
本平瓦刻印				230×245	筋長 140
				230×243	筋長 135
				265×290	筋長 145

## 二. 巴瓦類

符号	文様 (拓本)	名称	刻印	寸法	備考
		16玉右三ツ 巴紋入り 軒巴		5寸丸× 250~230	尾が細長く納まる
		同上	無刻印	5寸丸× 250~230	尾はあまり長くない。 巴頭が押圧平べったい
		同上	同上	同上	三ツ巴はためて、尾が短い
		家紋入り 隅巴	家紋矢筈文	5寸丸× 310	アゴ付
		家紋入り 鳥休瓦	同上	5寸丸× 460	

産地は現在の大分市佐賀岡町細地区(肥後藩細村)を中心とした地区と地元佐伯に考えることが出来る。では佐伯での瓦製造は何時頃からか。佐伯市史によると、文政年間の末頃とあるも、技術の未熟と需要少なきをもって振るわず明治・大正期に盛んになるとある。鶴望地区に良質の粘土が出た最盛期には30軒程の瓦製造業者があったと鶴望の臨区で聞き取り調査をする。この地区が旧村名で「下野村」であり、この西に占市村があり近

年まで瓦を制作していたとのこと。又、坂山地区の星宮にも窯元があった。

この臨地区で少し古めの瓦に「製藤安」の刻印を発見。これは番匠川の南の上城地区にあり、年代は新しい。又、「製田岩田堅上」の刻印の瓦があるがこの地区は上城地区の南方になり、さらに新しい。近世江戸期には切畑村に瓦師が居て、門田須平(旧弥生村)で瓦を制作していた由。須平では弥生町指定有形文化財(現佐伯市指定)の瓦

庚申塔も焼かれるなど、全国でもその類例を見ない作品がある。庚申塔は部落の入口等に設置されていたが近年では道路工事時等に除かれ、他所からも須平部落外れの山裾に集められ、一同に会されている。



写真33 瓦製庚申塔



写真34 須平庚申塔群

切畑産の瓦が旧坂本家（佐伯市指定有形文化財）の鬼瓦より出る。ヘラ書きで下記の通りである。大棟鬼瓦背面に〔佐伯切畑村瓦師 長蔵〕、隅棟鬼瓦より〔瓦師長蔵〕とある。

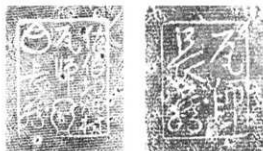


写真35 旧坂本家鬼瓦ヘラ書き 拓本

細地区産出の鎌軒瓦当紋様は花卉状文均整唐草葉文で仕上げられ、窯元はその刻印より



が認められる。

細和の瓦が1番多数であり、この瓦当文と同類形状文である物が19世紀前期から中期頃であり、また、御居間建設時期と合致する。

この年代で細地区産の細和、細利などと佐伯産の瓦当文が非常に酷似している。佐伯では切畑村以外では瓦の製造は明治・大正と後発であり、技術の伝達が細や神崎など佐賀関地区の瓦師等から受けたと考えられ、版木も授かったものがあり、紋の使用を許されたと考ええる。



写真36 細利刻印瓦当文 拓本



写真37 下ノ村刻印瓦当文 拓本



写真38 細和刻印瓦当文 拓本

明らかな佐賀関地区産の瓦は細利、細和、神山であり、下ノ村は間違いなく佐伯産であるが、

☐と☐は大分府内城宗門櫓や日出町深江地区にも見られることから佐賀関地区産と考えても良いであろう。☐、☐や椀平瓦にある上記以外の刻印の瓦産地は佐伯産の可能性は高いが、現段階では特定できない。



▲ 望ヶ町 伯佐より山城

写真39 明治44年時城山より佐伯町を望む



（原野真尋氏撮影）

角一の街市並居るせぬ限りは織行衆

写真40 大正8年時の池彦付近上空よりの写真

参考文献

- 池彦（旧毛利家）御居間・調査報告書（佐藤巧著）
- 佐伯市史（佐伯市）
- 山口大学考古学論集  
近世府内城・近世府内城下町出土瓦の年代的な研究（吉田寛著）
- 豊後における明治時代前半の瓦当文様（吉田寛著）

●佐伯市指定有形文化財

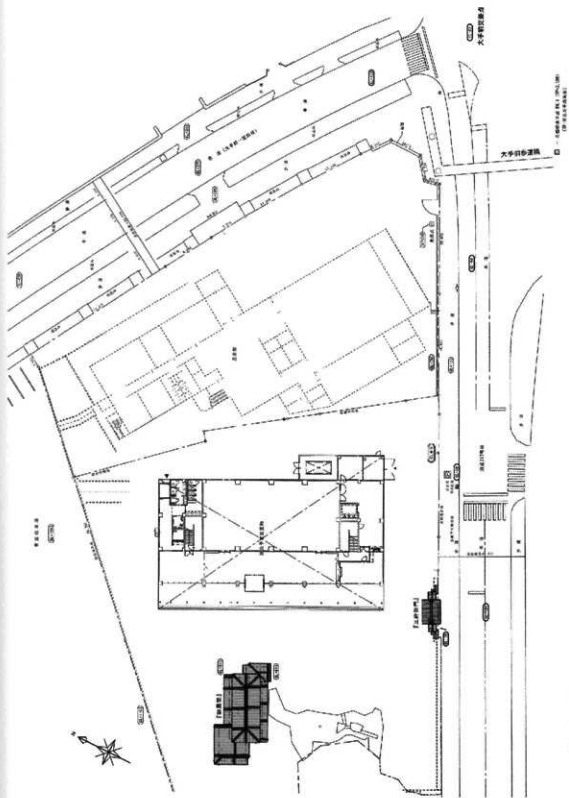
旧坂本家住宅保存修理報告書（佐伯市教育委員会）  
古写真提供

- 池彦門ポストカード（佐藤巧氏）
- 明治44年時城山より佐伯町を望む（佐伯市教育委員会）
- 大正8年時の池彦付近上空よりの写真（佐伯市教育委員会）



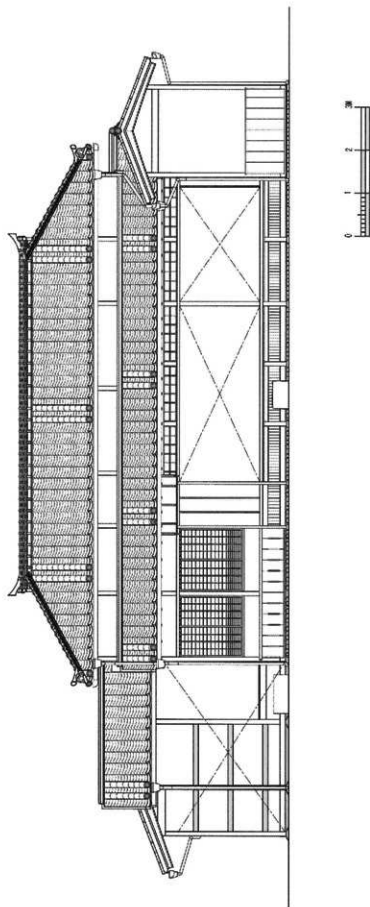
圖

面

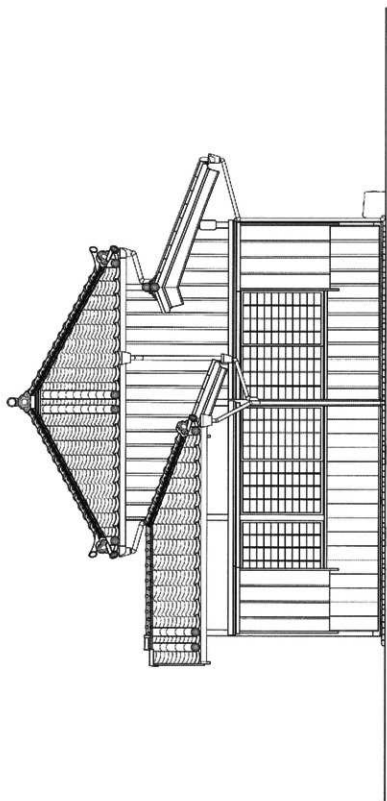


1 竣工 配置図

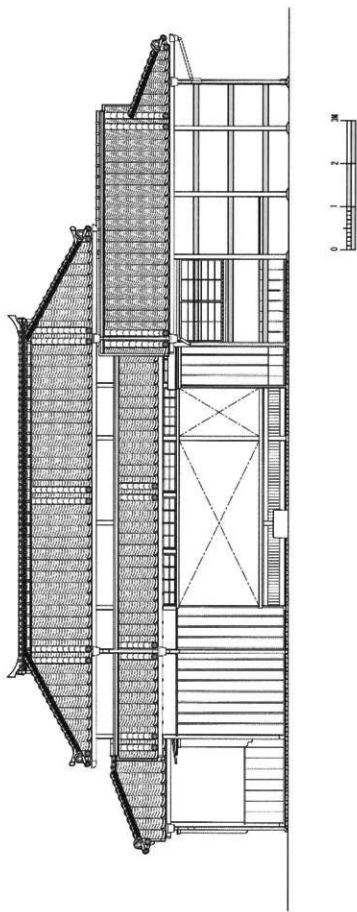




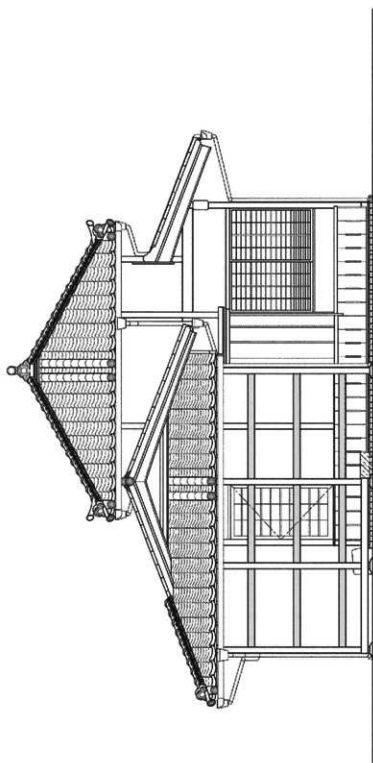
3 竣工 御居間正面(南)図



4 竣工 御居間東側面図



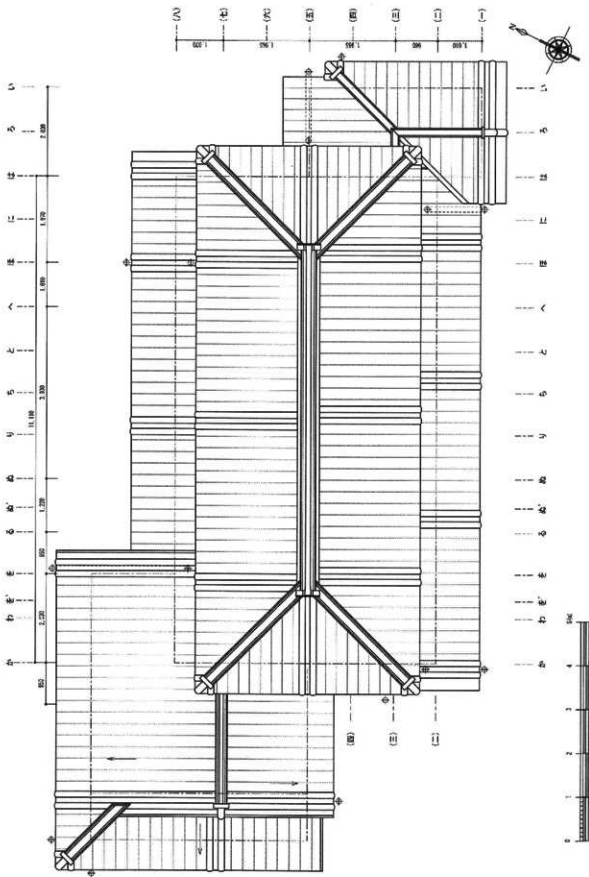
5 竣工 御居間北側面図



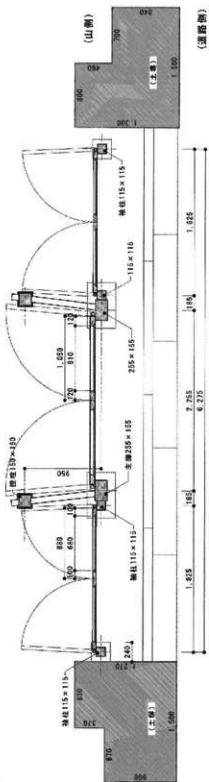
6 竣工 御居間西側面図



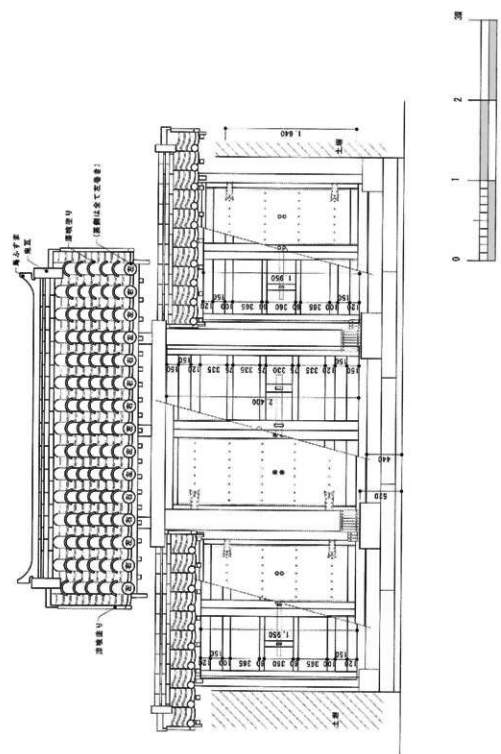




8 竣工 御居間屋根伏図

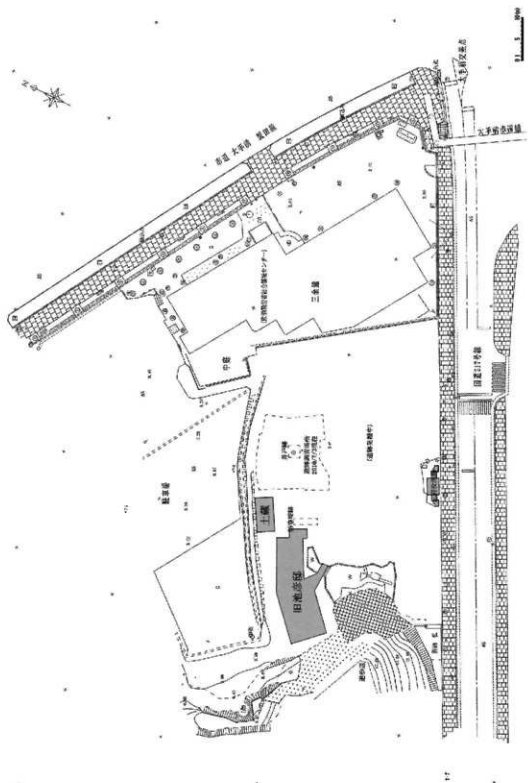


9 竣工 三府衙門平面圖

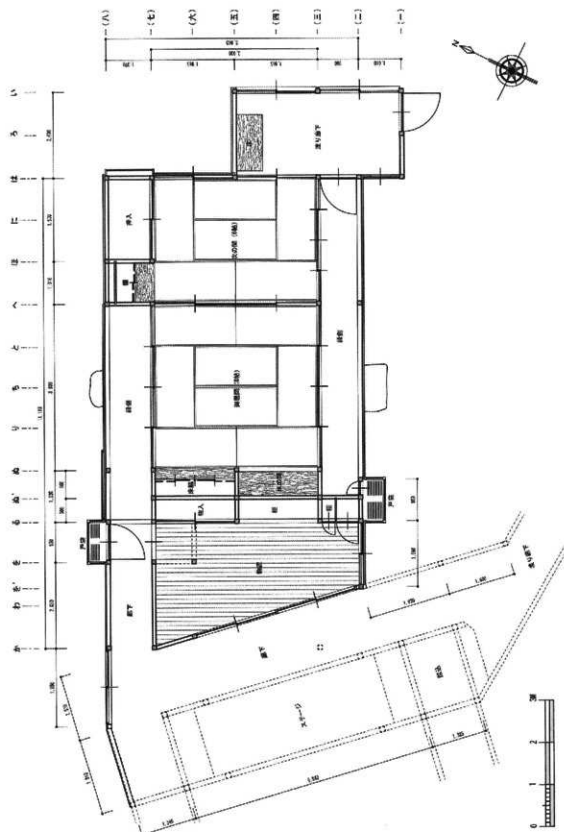


10 竣工 三府御門正面 (南) 図

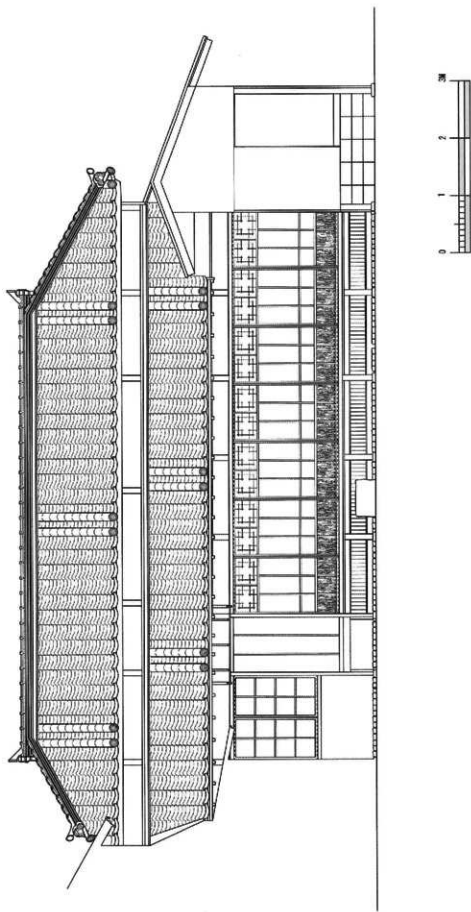




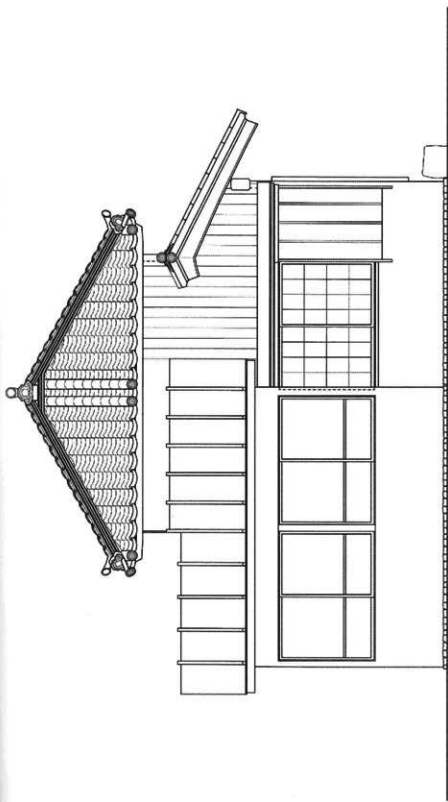
12 修理前 全体配置図



13 修理前 御居間平面図

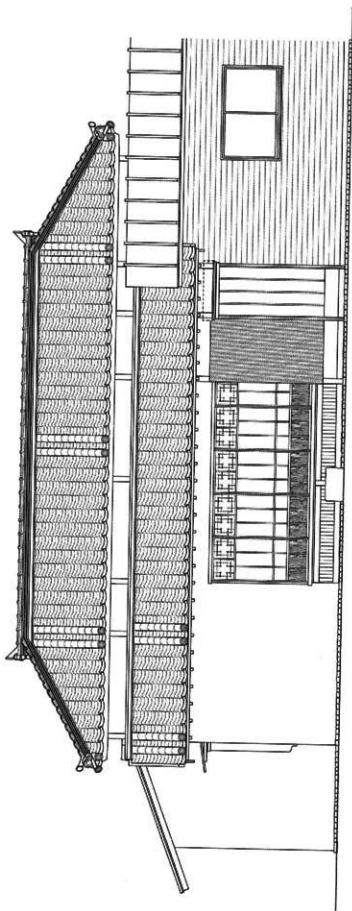


14 修理前 御居間正面（南）図



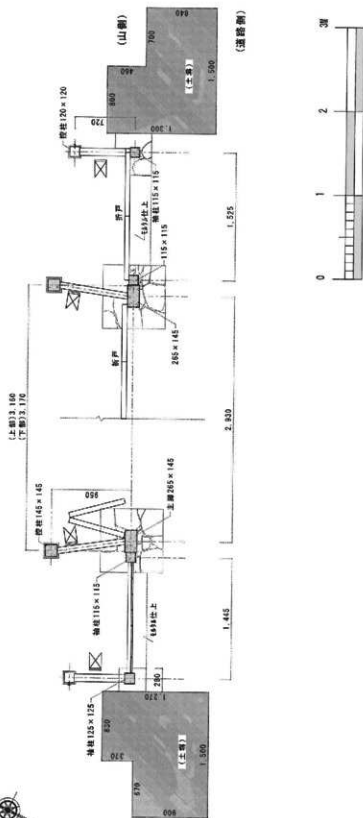
15 修理前 御厨間東側面図





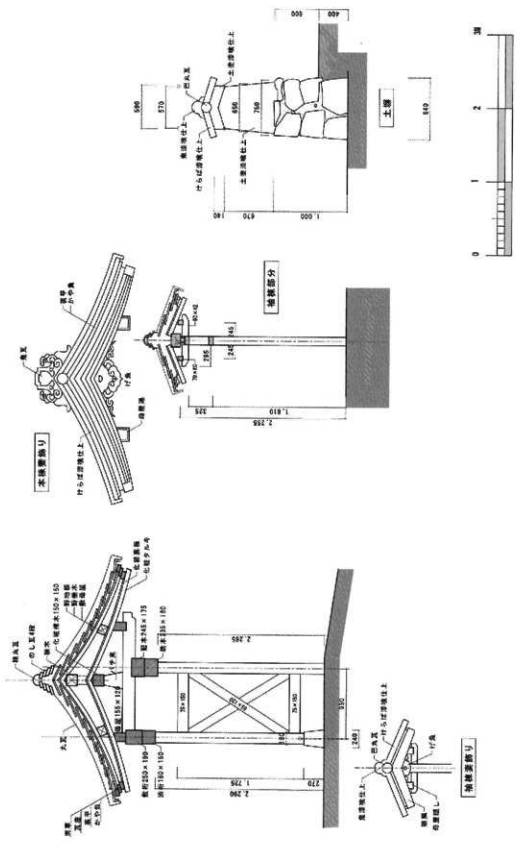
16 修理前 御居間北側面図





18 修理前 三府御門平面図





20 修理前 三府御門断面図

写

真

上：竣工 下：修理前 御居間



外観 南面



外観 南面



外観 西面



外観 西面増築部



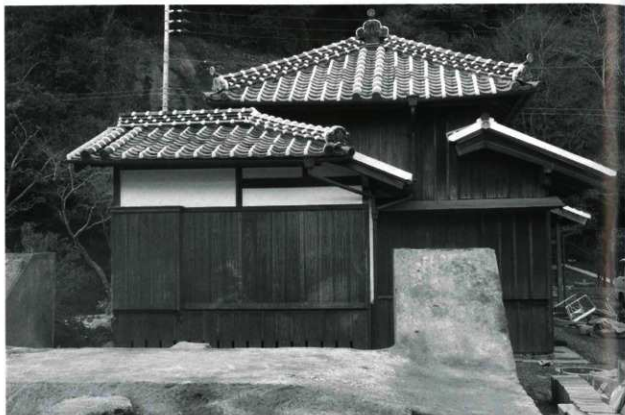
上：竣工 下：修理前 御居間



外観 北面



外観 北面

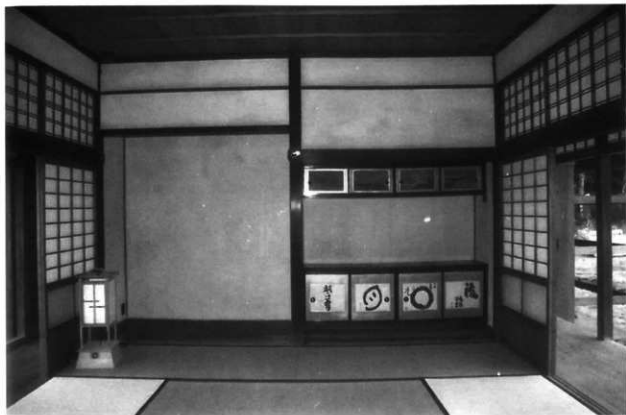


外観 東面

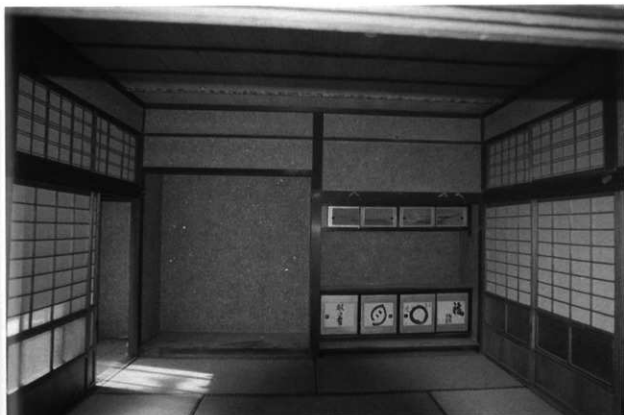


外観 東面

上：竣工 下：修理前 御居間



内観 御居間 8 帖



内観 御居間 8 帖



内観 御居間 8帖から次の間



内観 御居間 8帖から次の間

上：竣工 下：修理前 御居間



内観 次の間



内観 次の間



内観 渡り廊下



内観 渡り廊下

上：竣工 下：修理前 御居間



内観 御化粧間



内観 御化粧間

上：竣工 下：修理前 御居間



内観 南エン



内観 南エン



上：竣工 下：修理前 御居間



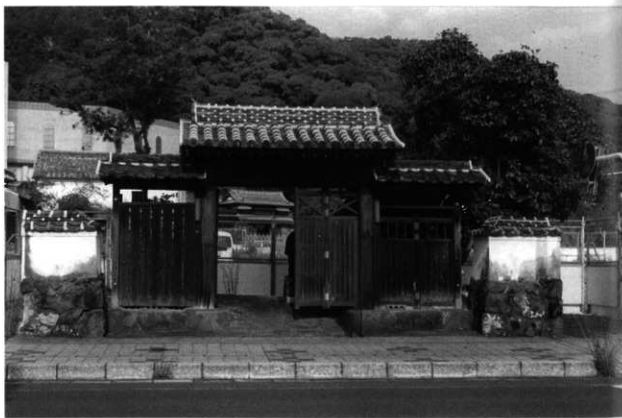
内観 北エン



内観 北エン



三府御門



三府御門



南エンと渡り廊下接合部雨漏り腐朽



北エン北側に傾斜



エン床下窓連子欠損



間仕切欄間切抜き三扇左端扇欠損



りノ三柱脚サイコロ継



はノ五柱腐朽 足固め接合部



いノ三柱脚部土台腐朽



ぬノ八柱脚土台欠損 十文字目違継指示



をノ八柱脚土台腐朽



八通りは～へ間土台50cmを残し欠損



野地板タルキ部の欠損



野タルキの腐朽、損傷



はノ一～二土台腐朽



八通り外壁破損ラスモルタルドエアートックス



三府御門 支柱グラつき防止の斜材が入る



三府御門 同左 (支柱と控柱をボルトで緊結)



曳き移転に先立ち渡り廊下部の分解



屋根瓦の除去



曳き移転準備 外壁モルタル除去



建物移動中 渡り廊下部除去



建物移動後の立地 奥に広間布基礎



再生土プール 除去土をストック



南エン現況床及び御居間床板除去



野地及び上壁除去



下屋野地除去



北エン後補修理外壁除去（ランマ障子内蔵）



三府御門 屋根瓦除去



三府御門 同左野地



三府御門 脇門部除去



三府御門 冠木、助木と敷桁と添木間離脱



三府御門 柱脚部解体



三府御門 境界部掘り起し（右階の礎石列）



使用壁補足上の視察



使用真竹の視察



瓦の音響調査で選別



移転前の仮設シート養生



移動中



礎石 木の根の浸食を受ける



御居間仮移転完了



礎石除去 礎石下地業石組



杭打ち施工



地中梁用床掘



土捨て 月1回の切返しその都度蟻を切込む



杭頭処理



基礎地中梁 配筋 コンクリート打設



礎石再据付



古色塗装試験塗と古色塗料



木部加工 (土台等)





木部加工 柱金輪継



木部加工土台下養生栗板を入れる



定位置に曳き戻す



仮設工事 外部足場と素屋根掛け



木工事 渡り廊下部小屋組外



木工事 北面屋根増築部



木工事 腰板取付け



建具チェック



屋根工事 杉皮下地施工



補足軒瓦



屋根 瓦葺き 一筋土置きで葺く



屋根 谷瓦葺き



屋根 漆喰巻き



左官工事 エツリ竹小舞掻き



左官工事 漆喰見本作成



左官工事 中塗り



左官工事 仕上塗り



漆喰拵え 木白で衝く



雑工事 三和土叩き



雑工事 牡蠣貝殻敷き



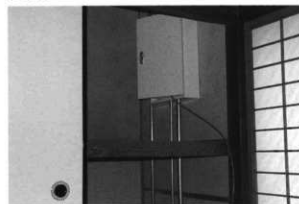
建具取付



樋取付



雑工事 行灯



雑工事 電気分電盤取付



三府御門 主支柱組立据付



三府御門 脇門小屋組立



三府御門 脇門 屋根下地



三府御門 正面石階設置



三府御門 主門 殿放し組立



三府御門 柱脚寄巻組立



三府御門 門扉組立



三府御門 完了



ボーリング調査



広間と御居間屋根接合 桁と貫に土壁痕跡



南西隅部広間に接続



広間天井裏に御居間屋根入込み



渡り廊下小屋 隔水欠き



瓦下地技法 野地板より瓦葺替え有り



屋根野地板 小間返しは当初 ベタ貼は修理部



樋受石残存



エン東石 コンクリート東下より木束の当り



主屋北西に礎石列が見つかる



土台外面に残る和釘痕 腰板貼り跡



腰板残存 (土台は欠損)



御化粧間 当初足固め柱 (七番) 切断 広間廊下下に残る



御化粧間 南西間広間廊下下に残る切断柱 (又七) と足固めに雨戸数居



(い) 通り当初柱3本 足固・貫・腰窓敷居



(は) 通り(一)~(二)間戸袋痕跡と腰窓敷居の痕跡



床の間 柱壁チリ際の和紙



墨書 (い) 通り足固め横面に【廊下部】



墨書【○化粧間大引】



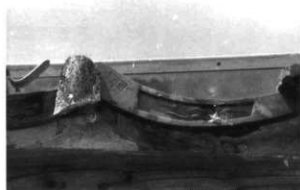
墨書【貳】 柱番付(へノ三) 柱足固め



墨書【拾六番】 柱番付(はノ七) 柱足固め



現況瓦の一部



瓦調査 下ノ村地区 刻印【安藤製】



調査 切畑地区 刻印【上】



瓦調査 藩主墓所お堂隅鬼 刻印 [上]



資料保存 札



資料保存材の一部



三府御門 桁と敷桁の離脱



三府御門 冠木離脱 当初柱柄と鼠走り止めかわし蟻穴



三府御門 支柱を取り屋根を浮かせた



三府御門 現況柱の調査





外観 東南面



外観 西面



外観 南面から渡り廊下



外観 北面



出入口掛庇



妻壁に在る掛庇支柱用の金具



窓鉄格子と腰の水切り



内部 1階東面



内部 1階西面と階段部



内部 1階西室軸部に筋違



内部 2階東面



2階 軸部に筋違



外観 西面



南エン外部



北エン床下部 床下換気孔連子



渡り廊下より御居間と接続の中廊下



南エン天井雨漏りによる腐朽



広間床の間に向かって



広間ステージに向かって



同 左



土蔵



土蔵



土蔵



土蔵



広間



広間



広間



広間

平成27年3月

佐伯市指定有形文化財

「毛利家御居間」・「三府御門」保存修理工事及び  
「土蔵」・「広間」解体工事報告書

平成23年度 社会資本整備総合交付金事業 佐伯市歴史資料館（仮称）  
建設に伴う既存建築物保存修理・解体工事に関する報告書

発行 佐伯市教育委員会  
〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号  
TEL 0972-22-4234

印刷 有限会社 勉強堂美術精版社